


 書評

DV エンゲルハルト, H シッパーゲス 著, 藤森英之 訳

医学と哲学の対話

生-病-死をめぐる21世紀へのコンテクスト

原田憲一

精神科医は精神医学(たとえば人間学的精神病理学)と哲学の関係がいかに密接かをよく知っている。しかし, 生物学的精神医学ましてや身体医学ないし医学一般と哲学の結びつきを十分に認識してはいないだろう。

本書の原題は「20世紀における哲学と医学の間の内的結びつき」。科学史, 医学史に精通した哲学者 DV Engelhardt と精神医学専門医でもある著名な医学史家 H Schipperges の共著。5つの章から成る。序章に続いて「哲学と社会哲学における医学」の章で, 「哲学がいかに医学を論じているか」を医学史家が書く。次の章「医学と医学的人間学における哲学」で, 「医学の中にいかに哲学があるか」を哲学者が説く。第4章は「医学の理論と方法論」, そして終章は「結果と期待」。哲学者と医学者によるこのような共同作業は, 本書が掲げる課題を解くのに最上の構想となっている。

すべての章で古代から現代に至るまで, 哲学と医学をめぐる問題を論じた多数の哲学者, 医学者の論述を取り上げ紹介する。1つの, あるいは1人の学説を詳しく展開するのではなく, 実に数百におよぶ哲学者, 医学者の見解に触れ, 数百の文献を列挙している。特に厚くない本であるが, 密度の濃い文献展望的な著作である。この問題を研究しようとする者にとって, 貴重な手引き書になる。

素朴に「人間とは何者か」(E Kant)という問いが, 哲学の重要な命題の1つである。「生, 病, 死」を考え, 理解しようとし, 思うことは, 哲学と医学に共通している。また本書が鋭く指摘するように, 医学理論といわれるものが

いかに多く哲学であることか, 私たちはもっと真剣に受け止めるべきだろう。医学者はこのことにしばしば無頓着である。医学理論が, 言葉や概念の問題, 因果性や合目的性のこと(病因や誘因など)への深い考察なしに行われている。

本書は1980年当時の西ドイツで, 哲学に関する叢書の1巻として刊行された。すでに4半世紀も前の本であるが, 今日でもその内容は新鮮さを失わない。というより, 次に述べるように, 今日いっそうその価値が高まっているといつてよい。

本書で示唆されているように, 西洋近代医学が生まれた17~18世紀には医学と哲学はしばしば1つのものであった。それが, 自然科学の急速な勃興の中で, 医学は哲学から離れて現代医学となる。その医学と哲学の疎遠な仲が, 今日再び, むしろ医学の側から哲学に近づき縋ろうとしている。それは, 20世紀後半になって加速度的に進展した新しい医学技術(臓器移植, 遺伝子操作, 安楽死, 生殖医学, クローン人間など)が, 「生, 病, 死」, 「人間とは何か」について, 医学自体に厳しい思索を迫ることになったからである。

訳者の藤森博士には K Jaspers の「精神病理学研究 I, II」(みすず書房, 1969/71)の訳書もあり, 哲学的精神医学には精通しておられる。本書が日本語で読めることはありがたいことである。精神科医のみならず広く医学に関係ある方々に座右の書として薦める。

(武田病院)

●A5 240頁 2005 定価2,625円(本体2,500円+税) 創造出版